

籠太鼓

世阿弥作

ワキ
松浦何某
ヲカシ
牢番
シテ 関清次の妻
季は 地は 肥前
雜

「是は九州松浦の何某にて候。さても某召しつかひ候ふ。関の清次と申す者。他郷の者と口論し。念なう敵をば討つて候。さりながら科人の事にて候ふ間。やがて籠者させて候。彼者大剛のものにて候ふ間。番の事かたく申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。

ヲカシ
「御前に候。」

ワキ
「彼者大剛の者にてある間。番の事かたく仕り候へ。」

ヲカシ
「畏つて候。」

ヲカシ
「いかに申し上げ候。清次が今夜籠を破りぬけて候。」

ワキ
「何と清次が籠よりぬけたると申すか。言語道断の事。さてこそ最前より堅く申し付けてあるに。さやうに油断仕りてあるぞ。さて彼者の子はなきか。」

ヲカシ
「いや子はなく候。」

ワキ
「妻はなきか。」

ヲカシ
「それは御座候。」

ワキ 「さあらば急いで其女をつれて来り候へ。

ヲカシ 「畏つて候。

シテ詞 「科人を召しこめられ候ふ上は。女までの御罪科はあまりに御情なうこそ候へ。

ワキ 「いかに女。さても汝が夫の清次。今夜籠を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ。まつすぐに申し候へ。

シテ 「もとより賤しき者なれば。我身の助かり候ふをこ

そ喜び候ふべけれ。わらはにはかくとも申さず候ふほどに。夢にも知らず候。

ワキ 「いや／＼何と申すとも知らぬ事はあるまじ。まづ／＼落居の有らんほど。夫の代りに籠者させ。其有所をたゞさんと。

地 「いまの女を引き立てゝ。／＼。いそぎ籠者になすべしと。さも荒けなき人心。情なしとは思へども。殺害の科をのがれえぬ。報いのほどぞ無慙なる。

く。

ワキ詞

「やあいかに汝は女に向ひ何事を致すぞ。其のさげなるによつて清次をも籠より逃いてあるぞ。所詮いまよりは鼓をかけて。一時づゝ時を打つて番を仕り候へ。

シテサシ
「げにや思ひ内にあれば。色は外にぞ見えつらん。包めども袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目の涙かな。

ヲカシ

「いや言語道断。籠中の女が狂気になりて候。やがて此よしを申さうするにて候。いかに申し上げ候。

籠中の女は以ての外狂氣仕り候。

ワキ

「是は誠にてあるか。

ヲカシ

「さん候。

ワキ

「あら不便や立ちこえ見うするにて候。やあいかに女。何故さやうに狂氣してあるぞ。

シテ

「何故狂氣するぞと承る。

「人の心の花ならば。風の狂する故もあるべし。況
んや偕老同穴と。ちぎりし夫もゆくへ知らで。の
こる身までも道せばき。なほ安からぬ籠の内。思
ひの闇のせんかたなさに。物に狂ふは僻事か。

ワキ
「げにく夫の別れ籠者の思ひ。一方ならぬ身のなげ
きに。物に狂ふはことわりなり。さりながらいづ
くに夫の有処を。知らせばやがて呼びとつて。汝
は籠より出だすべし真直に申し候へ。

シテ
「是は仰せとも覚えぬものかな。たとひ夫の有所を
知りたればとて。あらはし夫を失ふべきか。其上
夫のありどころを。夢うつゝにも知らぬものを。

ワキ
「やさしき女の言事やと。手づから籠の戸をひらき。
はや是までぞとく出でよ。

シテ
「御心ざしはありがたけれども。夫に代れる此身な
れば。此籠の内をば出づまじや。

カール
「是こそ形見よなつかしや。

地

「無慙やわが夫の。身に代りたる籠の内。出づまじ
や雨の夜の。つきぬ名残ぞかなしき。西楼に月落
ちて。花の間も添ひはてぬ。契りぞ薄き灯の。残
りてこがるゝ。影はづかしきわが身かな。

ワキ詞
「言語道断。かゝるやさしき事こそ候はね。此うへ
は夫婦ともに助くるぞとく出で候へ。

シテ
「かほどに情ましまさば。始めよりかく憂き目を見
せ給ふべきか。

カル
「さるにても我夫はいづくにあるやらん。なふ心が
乱れさむらふぞや。

一声
「みだるゝは。柳の髪か春雨の。

地
「涙にむせぶ心かな。

シテ詞
「なふくゝこれなる鼓は何の為めに懸けられて候ふ
ぞ。

ワキ
「あれこそ時守の時を知る相図の鼓よ。

シテ
「おもしろしく。異国にもさるためしあり。かや

うに鼓をかけて時を守りしこもあり。其心を得て古き歌に。時守の打ちます鼓声きけば。時にはなりぬ君はおそくて。

地「おそくも君が来んまでぞ。

シテ詞「なふ此鼓を打つて心がなぐさみたう候。

ワキ「やすき間の事いかやうにも打つてなぐさめ候へ。

シテ「鼓の声も音にたてゝ。

地「なく鶯の青葉の竹。

シテ「湘浦の浦や娥皇女英。

地「諫鞍苔むす此つゞみ。

シテ「うつゝもなやななつかしや。

地「鼓の声も時ふりて。く。日も西山に傾けば。夜の空も近づく。六つの鼓打たうよ。五つの鼓はいつはりの。ちぎりあだなる妻琴の。引き離れいづくにか。わが如く忍音の。やはらく打たうよや。やはらく打たうよ。四つの鼓は世の中に。く。

恋といふ事も恨みといふ事も。なき習ひならば。

独ものは思はじ。

シテ
「九つの。

地
「九つの。夜半にもなりたりや。あら恋しわが夫の。面影に立ちたり。うれしやせめてげに。身がはりに立ちてこそは。二世のかひもあるべけれ。此籠いづる事あらじ。なつかしの此籠や。あらなつかしの此籠。

ワキ詞
「此上は諷訪八幡も御知見あれ。夫婦ともに助くるぞはやとく出で候へ。

シテ
「げに此うへはさればとて。御いっぽりはよもあらじ。まことは夫のありどころ。筑前の宰府に知る人あれば。そなたへ行きてや候ふらん。

ワキ
「いしくも隠さず申したり。しかも今年はわが親の。

十三年に当りたれば。科ありとても助舟の。

シテ
「松浦の川や西の海。

ワキ
「彼國ちかき。

シテ
「極樂の。

地
「弥陀誓願のちかひかや。科を助くるあはれみの。

あらありがたの御慈悲や。

キリ
「やがて時日をうつさず。く。かくれし夫を尋ね
つゝ。もとの如くに帰りるて。むすぶ契りのすゑ
久に。松浦の川や二世の縁。げにありがたき心か
な。く。